

「TEADA No.6」(学校図書, 2009.9.) 所収
新学習指導要領解説連続講座 「新しい生活科の姿」
第2回 気付きの質を高める
上越教育大学大学院 木村吉彦

はじめに

今回の改訂では、内容及び内容の取り扱いについて改善された事柄として5つ挙げられています。その第一番目が「気付きの明確化と気付きの質を高める学習活動」です。

第2回の今回は、この「気付き」や「気付きの質を高めること」について取り上げます。

平成10年の改訂のとき「知的な気付きを大切にすること」が取り上げられました。また、今改訂に当たって、理科教育との接続とも深くかかわる「科学的な見方・考え方の育成」が挙げられました。一方、全国研究指定校報告分析(2005)では、生活科の気付きには「対象への気付き」と「自分自身への気付き」の2種類があることが指摘されています。

「活動あって学びなし」の批判に応えようとした「知的な気付き」、実践の中から明らかにされた2種類の気付き、これからの生活科の方向を決めるであろう「気付きの質」と「科学的な見方の育成」、これまでもこれからも「気付き」は生活科にとって教科の本質にかかわる問題でありつづけると思います。

1. 気付きとは

今回の改訂により、生活科における全ての内容において、具体的な学習活動や学習対象を示すとともに、学習対象とかかわったり学習活動を行ったりして、関心をもつこと、気付くこと、分かること、考えることなどの大切さが明確にされました。

ここでは、まず「気付き」の定義付けから確認しましょう。

気付きとは、i)対象に対する一人一人の認識であること、ii)児童の主体的な活動によって生まれるものであること、iii)そこには知的な側面だけでなく情緒的な側面が含まれること、iv)気付きは次の活動を誘発するものであること(『解説』4頁)、というように明確な定義がなされました。

この中で特に大切なのは、「一人一人の認識である」という定義です。これは、子どもそれぞれの「主観」を大切にしましょう、ということです。生活科は、かつての低学年理科や社会科と違い、子ども一人一人の思いや願いを大切にします。そのとき、主観に基づく子ども独自の気付きを認めてあげましょう。実は、それがやがて客観知(科学的な認識)に結びついていくのです。

さらには、学年の目標において、目標(1)では「地域のよさに気付き」、目標(2)では「自然のすばらしさに気付き」、目標(3)では「自分のよさや可能性に気付き」という言葉が加えられ、学習活動において、一人一人の子どもにどのような認識が育つことが期待されているかが明確に示されました。これらの認識の源が、すべて主観に基づく気付きにあるのです。

2. 対象への気付きと自分自身への気付き

「はじめに」でも述べましたが、気付きには2つの種類があると考えますと、子どもの気付きの見取りがしやすくなります。

①対象への気付き

自分とのかかわりで働きかけ、働き返された「ひと・もの・こと」についての気付き（他教科の「知識・理解」に類似）のことです。主観的な知のレベルから客観的な知のレベルにまで高まることが期待されます。このとき、見つける・比べる・たとえるなどは、対象への気付きの質を高める上で重要な「考える力」です。

②自分自身への気付き

自分のやったこと（活動内容）や今の自分の気持ちの自覚から始まり、「わかるようになった自分」「できるようになった自分」つまり「成長した自分」への気付きにまで至りたいものです。各単元・小単元の振り返りで気付かせることができます。例えば、「小屋掃除を上手にできるようになった自分の自覚」は、児童に自己肯定感を持たせ、生きる自信を持たせることにつながります。この生きる自信が「自立への基礎」を養います。

3. 気付きの質が高まるとは～実践例から～

◎「ぐんぐん！すくすく！わたしのおやさいさん」における気付きの実際

（実践者：上越市立高志小学校 平成19年度2年生担任 水澤恵理子教諭）

①対象への気付き

2年生になると、先生が用意しなくても、本を自分で購入したり、図書館から借り出したりして教室に置いておく子どもが現れました。そして、本を持って畑に出かけ、野菜のすぐそばで調べる行動をとる子どもが現れました（写真）。日常的な栽培活動（繰り返し畑に通い、毎日野菜と対面する活動）が子ども達に強い愛着とこだわりを生み、自主的に本を手にする行動につながったと思われます。本を自分で手に入れるという行為は、情緒的な側面としての気付きが高まり、愛着・こだわりさらには意欲を生み、それが畑で本を読むという行動に結びついたと思われます。この意欲は、対象への気付きの知的側面の前提になります。

一方、栽培技術や収穫の方法という知的側面での対象への気付きも高まっています。気付きの知的側面での高まりは、主観的な知のレベルから、より客観的なレベルの知にまで高まることが意味しています。例えば、A児はキュウリを収穫するに当たって、先生のいつもの指導をもとに「キュウリさんにとっていい？って聞いたら、いいよって言ってくれたよ」とまだ10cmにも満たない実を収穫しました。その結果、「とげとげがあって味も苦くておいしくなかった」と感想を述べています。まさしく、主観的に（自己中心的に）収穫してしまったのです。それに対してB児は、「おじいちゃんからキュウリは長さ20cm・重さ100gが収穫の目安と聞きました。本にもそう書いてありました。」という情報をお野菜さんスピーチで紹介しました。するとA児のみならず、クラスみんなが定規を持ち出して20cmを測り、収穫し始めました（写真）。水澤先生は30cm物差しを算数学習に先駆けて全員に配ったそうです。このように、より客観的な尺度による

収穫の目安を自分たちの力で情報収集し、かつ行動に移すことができたのです。2年生達の、本で調べて客観的情報をおとに正しい収穫時期を特定するという活動はまさしく、情緒的・知的両面での対象への気づきの質の高まりを示していると言えます。

②自分自身への気づき

自分自身への気づきはどうでしょうか。水澤先生は、「夏やさいさんがくれたもの（できれば理由も）」という課題で作文を書かせました。2人の作文シートを紹介します。

夏やさいさんがくれたものはみです。二つ目はきもちです（なぜなら、わたしはいじっぱりでやさしいきもちはほんのすこししかないから、やさしいきもちをくれたとおもいます）。三つ目はゆうきです（なぜなら、ほんとうはわたしははずかしがりやだからゆうきをくれたとおもいます）。	夏やさいさんがくれたのはミニトマトです。二つ目はいのちです。三つ目は力です。四つ目はこころです。やさしいこころです。
---	--

全ての子どもが理由まで付けて作文を書けたわけではないそうですが、心情面での自分の成長について気付いていること、また言葉で表現できていることに驚きます。個人差はあるものの、もう一人の自分による自分の観察力の育ちには目を見張ります。抽象的な思考力の高まりは、対象への気づきのみならず自分自身への気づきにも明確に現れていることが読み取れます。年間計画に立ち返れば、日々の継続的活動（繰り返し）と頻繁な振り返り、そして視野を広げる情報や調べ方の情報の提供、それらが抽象的な思考力の発達と相まって、2年生の子どもならではの気づきの高まりをもたらしたと考えられます。

おわりに

充実した体験を繰り返すことと教師の適切な働きかけにより、子どもは様々なことを発見し、発見した喜びから別のもものと比べたり、たとえたりする活動と表現をするようになります。これらはすべて充実した活動や体験の結果であり、気づきの質を高め、思考力を高めることに結びつきます。気づきのもつ情意的な側面は、愛着やこだわり、さらには意欲に結びつき、知的な側面は、主観的な気づきからより客観的な気づきへと高まっていきます。気づきの質を高めるために、先生方には4つの学習環境設定を心がけて下さい。

第1に、対象とじっくりかかわれる時間を確保すること。第2に、多様な対象とかかわれるようにすること。例えば、野菜作りでは、子どもに自分の植えたい野菜を決めさせてください。第3には、気付いたことを表現する機会を多く設けること。第4には、交流の機会を持つこと。表現と交流によって、子ども達の気づきの共有化が図られます。この気づきの共有が気づきの質を高めるきっかけを与えてくれるのです。

<引用・参考文献>

木村吉彦『気づきの質を高める生活科12ヶ月』（学校図書,2008）

